

右方の脚柱から見れば、こゝにも古代彫刻家は、其の束縛を真正面から拂ひ除けようとはしないながら、巧みに之を逃れようとしてゐる。柱の正面全體は、佛教の極樂の六階段を上下に列べてゐるが、之は五官に快感を與へるものであり、従つて感覺界に屬し有形美術に入るものであるが、他の極樂は之と異なる。常に斯うして裝飾を施してゐるけれども、この他佛陀の傳説もある。その一々の詳しい記述は已に出版されてゐるから(乙、八三頁以下)其の一二に止めて、中部横材の正面には佛陀の「出家」であるが、主なしの馬を描いてゐる。左方の脚柱には、成道、三迦葉の歸佛、頻毗娑羅 *Bimbisāra* 王の來駕があり、右脚柱の内側には、「迦毗羅衛歸城」を圖してある。下部の横材に於ては、阿育王の二傳説を以てし、阿育王の菩提樹來詣と、羅摩迦國 *Rāmagrāma* の遺骨塔巡拜とであるが、之は最初分骨の八塔の一であり、象が之を護持してゐる所を寫してゐる。然るに、南門では之を龍の姿に現はしてゐる。